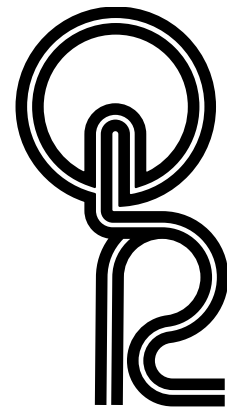


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 14 No. 2, 2007



古琵琶湖層群の淡水成粘土に挟まる佐川 火山灰層（約60万年前）を観察する参加者（第11回講習会「火山灰層を用いた調査法・分析法」にて、2007.1.27 水野清秀撮影）

Vol. 14 No. 2

April 1, 2007

地球惑星科学連合大会プログラム・・・2	日本第四紀学会「学会賞、学術賞、功 労賞」新設について・・・14
2007年大会案内(第2報)・・・6	評議員会議事録・・・14
Quaternary Perspectives 刊行案内 ・・・10	50周年記念事業募金者芳名・・・20
「三宅賞」「奨励賞」候補者募集・・・10	日本第四紀学会各種規定・・・21
講習会報告・・・11	幹事会議事録・・・23
シンポジウム報告・・・12	会員消息・・・24
会員名簿作成のお知らせ・・・13	

日本地球惑星科学連合2007年大会プログラム

日本地球惑星科学連合2007年大会が下記のとおり開催されます。2007年大会には過去最大の3000件余りの発表が申し込まれ、6日間の会期で開催されます。日本地球惑星科学連合が発足して満二年となりますが、地球惑星科学を学際的に盛り上げていく場として合同大会の意義は一層重要となります。みなさまの積極的な参加を期待しています。

期日：2007年5月19日(土)～24日(木)

場所：幕張メッセ国際会議場

大会詳細：<http://www.jpгу.org/meeting/index.htm>

確定プログラム公開：2007年4月3日(月)

各セッションの日程と会場は上記大会ウェブサイトで確認できます。

事前参加登録(割引料金)締切：2007年4月13日(金)正午

第四紀関連オーラルセッション(一部抜粋)

日	時間	セッション名	会議室
5月19日	9:00～12:15	G120:堆積物・堆積岩から読みとる地球表層環境情報	301B
5月20日	9:00～10:30	Z236:地形	202
5月22日	9:00～17:00	T235:連動型巨大地震の発生様式と長期予測	302
5月22日	10:45～17:00	W160:コア研究が拓く地球環境変動史	101B
5月23日	9:00～12:15	S141:活断層と古地震	303
5月23日	10:45～17:00	Q227:GPR(地中レーダー)を用いた浅層地下イメージングの現状と課題	301B
5月24日	13:45～15:15	Q140:沖積層研究の新展開	301A
5月24日	9:00～12:15	Q139:第四紀	301B
5月24日	9:00～12:15	L142:古気候・古海洋変動	101

各セッションのポスター発表は口頭発表と同じ日か前後の日の10:00～20:00で、コアタイムは18日を除き17:15～18:45です。

日本第四紀学会提案セッション

3月9日現在での暫定的なプログラムです。発表者は筆頭から3名までだけが記されています。確定したプログラムは3月下旬に発表者に通知され、4月3日以降大会ウェブページで確認できます。

セッションQ139『第四紀』オーラルセッション

5月24日(木)9:00～12:15 幕張メッセ国際会議場301B

- 9:00～9:15 梶 琢・山崎晴雄・徳山英一
渡島大島の山体崩壊における海底地すべり地形
- 9:15～9:30 鈴木毅彦・村田昌則
福島県会津地域を給源とする前期更新世に噴出した白河隈戸火砕流とそれに伴うテフラ
- 9:30～9:45 中里裕臣・中澤 努 北関東における飯縄西山テフラと横川第二軽石
- 9:45～10:00 小山善雅・久保純子 多摩川左岸における立川段丘面区分の再検討
- 10:00～10:15 福嶋 徹・植木岳雪
狭山丘陵の下部更新統・狭山層上位に挟在される軽石質テフラのフィッシュントラック年代
- 10:15～10:30 植木岳雪 関東平野西縁、立川断層の後期鮮新世以降の活動史

[休憩]

- 10:45 ~ 11:00 村田昌則・鈴木毅彦
千葉県銚子地域屏風ヶ浦に分布する犬吠層群中の前期更新世テフラ対比に関する再検討
- 11:00 ~ 11:15 勝田長貴・高野雅夫・川上紳一
水月湖底堆積物に記録されている堆積リズムとイベントの解析
- 11:15 ~ 11:30 池原 研・川村喜一郎・大村亜希子
海水準上昇に伴う沖合海域の堆積作用の変化 - 沖縄トラフと熊野トラフの例
- 11:30 ~ 11:45 北沢俊幸・七山 太
南シナ海沿岸に広域に分布する後期更新世～完新世の風成？堆積物“YSC” - 南部ベトナムの産状と年代 -
- 11:45 ~ 12:00 村上拓馬・勝田長貴・山本鋼志
モンゴル・フブスグル湖の堆積物の化学組成から推定される最終氷期から後氷期にかけての堆積作用の変遷
- 12:00 ~ 12:15 宮入陽介・横山祐典・塚本すみ子
SAR法を用いたテフラのRTL年代測定2 - 第四紀に噴出したテフラへの適用 -

セッション Q139 『第四紀』ポスターセッション

5月23日(水) 10:00 ~ 20:00 幕張メッセ国際会議場

コアタイム 17:15 ~ 18:45

- 1 近藤玲介・塚本すみ子
北海道北部，利尻火山における旧期火山麓扇状地の OSL 年代測定
- 2 吉田英嗣・須貝俊彦 浅間火山の大規模山体崩壊起源堆積物の化学組成
- 3 植木岳雪 関東平野西縁の丘陵を構成する鮮新～更新統の古地磁気層序
- 4 大井信三・山家慎之助・北村京子
茨城県瓜連丘陵引田層中に見いだされた前期更新世テフラ層
- 5 田村糸子・高木秀雄・山崎晴雄
千葉県銚子地域の犬吠層群から見出された含ザクロ石テフラ層 - 中津層群の含ザクロ石テフラ層 Mk19 との対比とその意義 -
- 6 岡崎浩子・中里裕臣
更新統下総層群木下層の浅海堆積システムの形成にみられるテクトニクスと堆積物供給の影響
- 7 猪熊樹人・重野聖之・七山 太
根室沿岸低地における津波堆積物の層序と堆積学的特徴
- 8 千葉 崇 千葉県小櫃川河口域における珪藻遺骸の分布特性
- 9 梶 琢・生野静香・根元謙次 駿河湾奥部大陸棚の地質構造
- 10 三枝芳江・須貝俊彦・鹿島 薫
珪藻分析からみた濃尾平野における過去一万年間の古環境復元
- 11 若林 徹・須貝俊彦・笹尾英嗣 濃尾平野沖積層の化学組成と粒度の関係
- 12 渡部 遼・岩本はるか・相澤育実
琵琶湖湖底表層堆積物の物理値に記録された気象要素の検討
- 13 岩本はるか 琵琶湖表層堆積物の物理量と気象観測データとの対応
- 14 菅沼悠介・青木かおり・金松敏也
北西太平洋海底コアにおける過去30万年間のテフラ層序：広域テフラおよび帯磁率変動曲線の対比に基づく年代モデルの構築
- 15 田力正好・高田圭太・野原 壯
火砕流堆積物の下刻速度と火砕流の堆積が気候変動に規制された段丘形成へ及ぼす影響

セッション Q140 『沖積層研究の新展開』 オーラルセッション
5月24日(木) 13:45 ~ 15:15 幕張メッセ国際会議場 301A

- 13:45 ~ 13:47 セッションの概要説明
13:47 ~ 14:00 ト部厚志・藤本裕介
越後平野の沖積層におけるイベント性火砕物の2次堆積作用の影響
14:00 ~ 14:13 佐藤明夫・鈴木正章・鈴木 茂
北海道南西部, 白老 - 勇払海岸の埋没礫質浜堤列と河成堆積物
14:13 ~ 14:26 竹村貴人・小田匡寛・木村克己 沖積層の軟弱粘土の動土質力学特性
14:26 ~ 14:39 木村克己・田辺 晋・中西利典
東京低地と中川低地下に分布する沖積層の地質・工学総合研究の展開 - 5年
目: 3次元地質・地盤モデル -
14:39 ~ 14:52 北田奈緒子・伊藤浩子・竹村恵二
関西圏における表層地質の分布状況 ~ ボーリングデータベースを用いた地層
の分布とその利用 ~
14:52 ~ 15:10 鴨井幸彦
越後平野における沖積層研究の現状と研究成果の活用策について
15:10 ~ 15:15 総合討論

セッション Q140 『沖積層研究の新展開』 ポスターセッション
5月23日(水) 10:00 ~ 20:00 幕張メッセ国際会議場
コアタイム 17:15 ~ 18:45

- 1 井内美郎 音波探査記録とボーリング資料との対応からみた大阪湾海底沖積層の層相
- 2 塚田 豊・三田村宗樹・吉川周作
大阪平野沖積層の堆積環境変化と沖積粘土の鋭敏性
- 3 北田奈緒子・伊藤浩子・竹村恵二
関西圏におけるボーリングデータベースを用いた地層の分布状況とその解釈
- 4 宮崎友紀・石原与四郎・江藤稚佳子
東京湾岸地域における3次元地質・地盤モデルの構築
- 5 江藤稚佳子・田辺 晋・石原与四郎
埼玉県三郷市で掘削された沖積層ボーリングコア(GS-MUS-1)の堆積相と中川低地にお
ける開析谷の横断方向の層相変化
- 6 中西利典・田辺 晋・木村克己
中川低地中部 ~ 南部に分布する沖積層の堆積環境と物性
- 7 田辺 晋・中西利典・石原与四郎
完新世における利根川の流路変遷 - 奥東京湾地域の荒川と中川沿いの沖積層からの検討 -

セッション S141 『活断層と古地震』 オーラルセッション
5月23日(水) 9:00 ~ 12:15 幕張メッセ国際会議場 303

- 9:00 ~ 9:15 楮原京子・今泉俊文・三輪敦志
真昼山地西麓における逆断層の発達と起伏形成
9:15 ~ 9:30 金 幸隆・岩崎貴哉・佐藤比呂志 魚沼丘陵の隆起と実変位
9:30 ~ 9:45 中山英二 跡津川断層系クリ - プ域の3次元密度構造
9:45 ~ 10:00 奥村晃史・近藤久雄・遠田晋次
糸魚川 - 静岡構造線活断層系神城断層南端, 木崎地区における古地震調査
10:00 ~ 10:15 渡辺満久・鈴木康弘・澤 祥
糸静線活断層帯の「塩尻峠ギャップ」への疑問
10:15 ~ 10:30 池田安隆・岩崎貴哉・伊藤谷生

糸魚川 - 静岡構造線中部，諏訪湖周辺における反射法地震探査

[休憩]

- 10:45 ~ 11:00 宇野知樹・宮内崇裕・宍倉正展
完新世離水海岸地形からみた相模トラフ沿いのプレート間地震の再検討 -
内房と外房で対比されない海成段丘の存在から -
- 11:00 ~ 11:15 丹羽雄一・須貝俊彦・大上隆史
濃尾平野完新統の電気伝導度にもとづく桑名・養老断層の活動史
- 11:15 ~ 11:30 稲崎富士・中西利典
ランドストリーマーツールを用いた三重県桑名市における桑名断層の浅部
変形構造イメージング
- 11:30 ~ 11:45 松本 剛
石垣島東方沖断層上に見られる変動地形と津波ポテンシャルの検証
- 11:45 ~ 12:00 林 愛明
チベット北部の昆崙横ずれ断層沿いの液状化を伴った古地震イベント
- 12:00 ~ 12:15 遠田晋次
古地震イベント年代・活動間隔推定に潜在するバイアス

セッション S141 『活断層と古地震』 ポスターセッション

5月23日(水) 10:00 ~ 20:00 幕張メッセ国際会議場

コアタイム 17:15 ~ 18:45

- 1 石山達也・中西利典・森下信人
日本海北東縁部・稚内市抜海およびノシャップにおける完新世海成段丘と地震性隆起
- 2 大津 直・田近 淳・新谷加代 北海道北部，問寒別断層帯の最新活動時期
- 3 森下信人・中西利典・石山達也
堆積相解析に基づく北海道北西部，天塩 - 初山別間における完新世段丘の形成過程とテクトニクス
- 4 重野聖之・七山 太・添田雄二
北海道東部，厚岸町床潭沼コアに認められた 1843 年大津波と先史巨大津波の痕跡
- 5 遠田晋次・吾妻 崇・小俣雅志
庄内平野東縁断層帯の第四紀後期活動履歴と地震規模頻度の多様性
- 6 村山友之・佐藤早苗・氏原英敏 2004 年新潟県中越地震と地下水異常・活構造
- 7 青柳恭平・阿部信太郎 断層関連褶曲の非対称性に基づく日本海東縁部の断層モデル
- 8 吉岡敏和・細矢卓志・橋本智雄 富山平野西縁，呉羽山断層の活動履歴調査
- 9 道家涼介・竹内 章 牛首 - 早乙女岳断層間の地形と地質
- 10 岡田真介・池田安隆・越後智雄 長野盆地西縁断層帯における地下構造
- 11 杉戸信彦・澤 祥・田力正好
糸魚川 - 静岡構造線活断層帯北部の白馬村・池田町におけるボーリング調査 (速報)
- 12 原口 強・吉永佑一・遠田晋次
高分解能音波探査で明らかになった青木湖湖底の神城断層の形状
- 13 澤 祥・渡辺満久・鈴木康弘
糸魚川 - 静岡構造線活断層帯中北部 (松本 ~ 諏訪 ~ 茅野) の変動地形調査および航測解析による平均変位速度解明
- 14 近藤久雄・遠田晋次・奥村晃史
糸魚川 - 静岡構造線活断層系中部の松本市街地周辺の航空レーザー計測と断層変位地形
- 15 田力正好・杉戸信彦 糸魚川 - 静岡構造線活断層帯重点的調査観測
- 16 野津太一・田中秀実
断層帯組織と 1718 年遠山地震におけるクーロン応力変化との比較検討
- 17 山田隆二・小村健太朗・松田達生
根尾谷断層水鳥地区における深層ボーリング調査と地殻応力測定
- 18 松田達生・小村健太朗・山田隆二

- 根尾谷断層水鳥地区における CSAMT 探査による断層帯浅部比抵抗構造
- 19 坂啓 惟・小林健太
警固断層の発達と変遷～ダメージゾーンに発達する断層岩からの考察～
- 20 中西利典・竹村恵二・齋藤武士
別府市浜脇地区のポーリングコア解析による朝見川断層の完新世の活動
- 21 吉岡敏和・新谷加代・家村克敏 布田川・日奈久断層帯の活動履歴調査
- 22 山本晋也・井上直人・堤 浩之
重力探査による亀岡盆地の伏在断層と基盤形状に関する研究
- 23 野原 壯・丹羽正和・安江健一
地下深部で活断層の破碎帯を同定する調査手法の検討
- 24 石黒聡士・杉戸信彦・隈元 崇
簡易高位置撮影装置 (WINKS 写真撮影装置) による断層変位地形の地図化の試み
- 25 山本和哉・伊藤信一・宮脇明子 数値標高モデルに基づく断層地形抽出技術の研究
- 26 谷口 薫・中田 高・渡辺満久
活断層長期評価の改良に向けた主要活断層の位置・形状に関する検討 - 横手盆地東縁および北上低地西縁活断層帯を事例として -
- 27 伏島祐一郎・宮本富士香・吉岡敏和 活断層データベースの抜本的改訂
- 28 アオン タン テイン・岡村行信・宍倉正展
Holocene crustal movement along the Rakhine coast of Myanmar deduced from the coastal terrace data
- 29 澤井祐紀・宍倉正展 チリ南部において発見された 1575 年地震の液状化痕
- 30 澤井祐紀・宍倉正展 化石記録から明らかになった 1960 年チリ地震に伴う地震性沈降
- 31 澤井祐紀・藤井雄士郎・藤原 治 宮城県山元町水神沼に見られる津波堆積物
- 32 宍倉正展・小松原純子・アオン タン テイン
前浜堆積物の高度分布と離水年代を用いた石巻平野における伏在活断層の活動履歴
- 33 藤原 治・澤井祐紀
静岡県中部の浮島ヶ原の地層に記録された南海トラフ周辺の古地震履歴 (速報)
- 34 小松原純子・宍倉正展・岡村行信
静岡県浮島が原低地の沈水履歴から推定される富士川河口断層帯の活動
- 35 池原 研 東海沖海底活断層沿いのタービダイトの堆積間隔
- 36 宍倉正展・越後智雄・前杵英明
南海トラフ沿いの巨大地震を記録する紀伊半島南部沿岸の生物遺骸群集
- 37 松岡裕美・岡村 眞・岡本直也 津波堆積物に記録された南海地震の繰り返し間隔

日本第四紀学会 2007 年大会案内 (第 2 報) 発表申し込み

大会の概要

1. 日時・開催場所: 2007 年 8 月 31 日 (金) ~ 9 月 2 日 (日), 神戸大学百年記念館(兵庫県神戸市灘区六甲台町 1-1)
<http://www.kobe-u.ac.jp/>
2. 日程
 - 8 月 31 日 一般研究発表(口頭およびポスター)・評議員会
 - 9 月 1 日 一般研究発表(口頭およびポスター)・総会・懇親会, 普及講演会
 - 9 月 2 日 シンポジウム
3. 発表の申し込み締め切り: 2007 年 6 月 15 日 (金)
4. シンポジウム

「瀬戸内海の変遷 - 自然・環境・人」

- 世話人: 兵頭政幸・加藤茂弘・松下まり子
全て依頼講演になります。詳細については次号で案内。
5. 巡検の概要
9 月 3 日 (月) ~ 4 日 (火) 実施の予定。詳細と申し込みは次号で案内。
 6. 宿泊: 本号にホテル一覧の案内を付します。
 7. 普及講演会(一般市民を対象)
9 月 1 日 「大地の変動と地震・津波」
神戸大学滝川記念学術交流会館
共催: 神戸大学都市安全研究センター、神戸大学内海域環境教育研究センター
 8. 大会実行委員会

実行委員会委員長 石橋克彦
 連絡先：実行委員会事務局長 兵頭政幸
 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
 神戸大学 内海域環境教育研究センター
 E-mail : mhyodo@kobe-u.ac.jp
 Tel : 078-803-5734
 Fax : 078-803-5757

発表の申し込み

1. 一般研究発表の申し込み

一般研究発表は口頭発表とポスターセッションが行われます。登壇者(筆頭者)としては1人1件のみの発表が可能です。一般研究発表を希望される方は9ページにある「発表申込用紙」(コピーでもよい)に所定の事項を記入の上、「3. 講演要旨の原稿の書き方」にしたがった写真製版可能な原稿及びそのコピー1部と共に6月15日(金)までに行事担当幹事までお送り下さい(必着厳守)。講演要旨原稿は2ページ分執筆してください。原稿の行事担当幹事への到着をもって原稿の受付といたします。申込用紙の書式には、連絡先としてファックス番号と電子メールアドレスを是非ご記入下さい。メールアドレスは、読みやすいようにご記入下さい(印字したものを歓迎します)。また申込用紙の代わりにその記載内容を、電子メールで送っていただくと事務処理上、助かります。行事担当幹事まで同内容をお送り下さい。

口頭発表(オーラル・セッション)での発表時間は1件15分程度(質疑応答時間を含める)を予定しています(発表件数によって変更の可能性あり)。十分な説明や討論を希望する方にはポスター・セッションへの申込をお勧めします。またポスター発表者には口頭ショートサマリー発表(1件あたり2~3分程度)をお願いするほか、ポスターの前で説明するコアタイムを設ける予定です。

要旨集原稿の送付先：

〒156-8550
 東京都世田谷区桜上水3-25-40
 日本大学文理学部地球システム科学科
 日本第四紀学会行事担当幹事
 遠藤邦彦 あて

Tel & Fax: 03-3290-5451 (研究室)

E-mail : endo@chs.nihon-u.ac.jp

(原稿送付は郵便でお願いします。メール添付は受け付けていません。また送付先は実行委員会ではありません。お間違えのないようにご注意ください。)

2. シンポジウムの原稿提出

シンポジウム発表で発表される方は、「3. 講演要旨の原稿の書き方」にしたがった写真製版

可能な原稿及びそのコピーに「発表申込用紙」(コピーでもよい)を添えて、6月15日(金)までに上記の行事担当幹事までお送り下さい(必着厳守)。原稿枚数は2ページまたは4ページでお願いします。今回は依頼講演者のみが対象となります。また発表申込用紙の代わりにその記載内容を、電子メールで送っていただくと事務処理上、助かります。行事担当幹事まで同内容をお送り下さい。

3. 講演要旨の原稿の書き方

原稿用紙は、発表者各自が用意したA4版白紙を、横書き・縦置きで使用してください。左右各2.5cm、上端3.0cm、下端3.5cmは空白にしてください。表題・著者名は、(例)のように和文表題・著者名(所属)、英文著者名・表題の順に書いてください。和文表題は、1行目の左側を1.5cmあけて(左端から4.0cm)左詰めで書いてください。2行以上にわたる場合でも1.5cmあけて左詰めで続けてください。和文著者名は、和文表題の後改行して、発表者を右端に右詰めで書いてください。2行以上にわたる場合でも1.5cmあけて右詰めにしてください。所属は和文著者名の後にカッコを入れて簡潔に書いてください。英文著者名・表題は和文著者名の後改行して、左詰め著者名・表題の順に「;」でつないで書いてください(所属は不要)。本文は英文表題の次の1行をあけて書き始めてください。行数・字数は自由ですが、36行・35字程度を目安としてください。不明な場合は昨年の要旨集を参考にしてください。本年も同一仕様です。ワープロ使用の場合は濃く印字してください。手書きの場合は黒色インクまたは黒色ボールペンを使用し、濃く細く書いてください。手書き図表の場合には黒インクを使用し原稿用紙に直接書くか、あるいは青色方眼紙・白紙・トレーシングペーパーなどに清書して枠内に貼ってください。図が原稿の上下端、左右端の空白部分にかからないようにご注意ください。印刷時にA4の原稿がB5版に縮小されますので、図の縮尺については「何分の1」という表現はしないで必ずスケールを入れてください。

4. 宿泊

次ページにホテル一覧の案内をします。

神戸大学へのアクセスマップ



<最寄り駅>

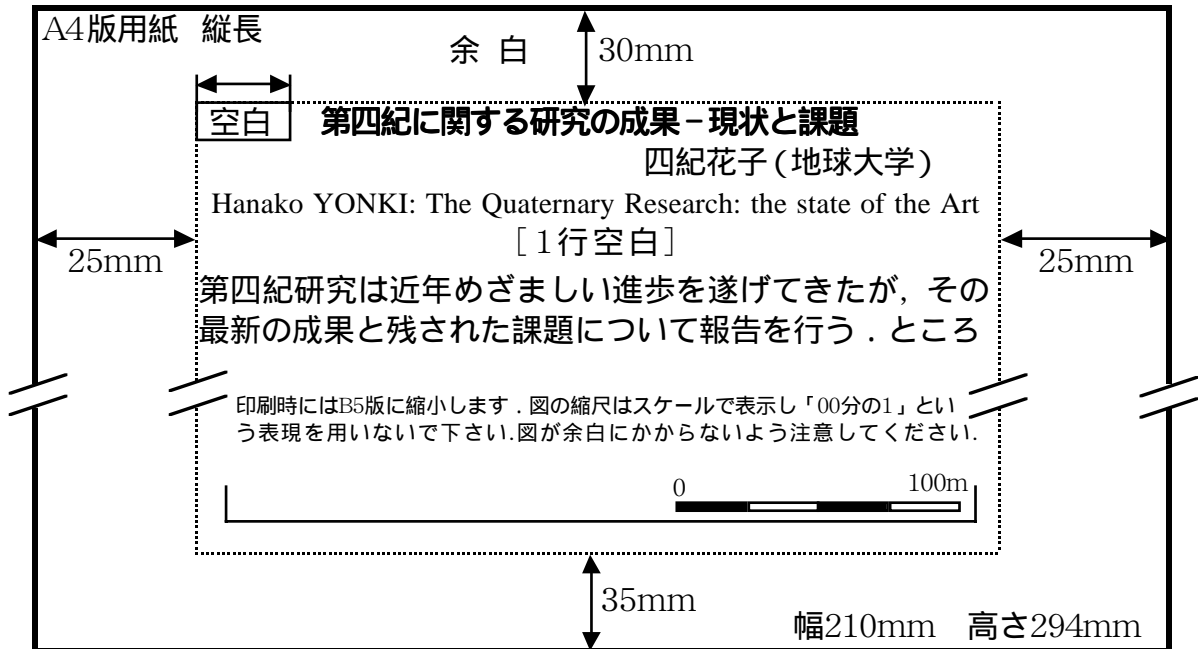
阪急神戸線「六甲」駅	(約 10 分)
JR 神戸線「六甲道」駅	(約 15 分)
阪神電鉄「御影」駅	(約 20 分)

神戸市バス 36 系統「鶴甲団地」行きに乗車、
「神大文・理・農学部前」バス停にて下車

周辺のホテル一覧

駅	ホテル名	電話番号	ホームページ	料金
三宮	ホテル 1-2-3 神戸	078-272-5000	http://www.hotel123.co.jp/lineup/kobe.html	5,140 ~
	東横イン神戸三ノ宮	078-271-1045	http://www.kobe-i.tokyuhotels.co.jp/	5,200 ~
	ダイワロイネットホテル神戸三宮	078-291-4055	http://www.daiwaroynet.jp/kobesannomiya/	6,000 ~
	ホテルモンテレ神戸	078-392-7111	http://www.hotelmonterey.co.jp/kobe/	6,200 ~
	ホテルモンテレアマリー	078-334-1711	http://www.hotelmonterey.co.jp/kobe/	6,200 ~
	北上ホテル ANNEX	078-391-8781	http://www.kitagami.jp/	6,510 ~
	グリーンヒルホテルアーバン	078-222-1221	http://www.ghu.jp/	6,500 ~
	神戸三宮ユニオンホテル	078-242-3000	http://www.unionhotel.jp/	7,500 ~
	三宮ターミナルホテル	078-291-0001	http://www.sth-hotel.co.jp/cs/	8,700 ~
	ホテルピエナ神戸	078-241-1010	http://www.piena.co.jp/	9,450 ~
	ホテルサンルートソプラ神戸	078-222-7500	http://www.sopra-kobe.com/	9,975 ~
	神戸東急イン	078-291-0109	http://www.kobe-i.tokyuhotels.co.jp/	10,185 ~
	新神戸	グリーンヒルホテル神戸	078-222-0909	http://www.greenhillhotel.com/kobe/
クラウンプラザ神戸		078-291-1121	http://www.cpkobe.com/	15,015 ~

「講演要旨の書き方の例」と「発表申し込み書」の書式



発表申し込み書

氏名・所属				
講演題目				
キーワード (3~5個) <small>講演要旨には掲載しません</small>				
代表者の連絡先	〒			
	e-mail :		Tel :	Fax :
発表種別 (を付ける)	一般研究発表			シンポジウム
	<input type="checkbox"/> 頭発表	<input type="checkbox"/> ポスター	<input type="checkbox"/> どちらでもよい	
スライド・OHP の使用 (を付ける)	<input type="checkbox"/> スライド (8枚以内)	<input type="checkbox"/> スライド+OHP (8枚以内)	<input type="checkbox"/> OHP (8枚以内)	<input type="checkbox"/> 液晶プロ ジェクター

Quaternary Perspectives 16(2) 刊行のお知らせ

国際第四紀学連合のニュース誌である Quaternary Perspectives の 16 巻 2 号 (2007) が出版されました。「Quaternary」の定義変更に伴う最新の情報が掲載されています。是非ご覧ください。

以下の URL からダウンロードが可能です。

http://www.inqua.tcd.ie/publications_quaternary_perspectives.html

<http://www.inqua.tcd.ie/documents/QP%2016-2.pdf>

2007年度 地球化学研究協会学術賞「三宅賞」および「奨励賞」候補者の募集

学会長 殿

地球化学研究協会理事長 飯山敏道

記

地球化学研究協会より、「三宅賞」および「奨励賞」候補者の推薦を依頼します。

下記の要領でご応募下さい。申請書類は、地球化学研究協会のホームページからダウンロードして下さい。

1. 三宅賞

対象：地球化学に顕著な業績をおさめた研究者

表彰内容：賞状、副賞として賞牌および賞金 30 万円、毎年 1 件 (1 名)

2. 奨励賞

対象：推薦締切日に 35 才以下で、地球化学の進歩に優れた業績を挙げ、将来の発展が期待される研究者

表彰内容：賞状および賞金 10 万円、毎年 1 件 (1 名)

3. 応募方法：申請書に略歴、推薦理由、研究業績などを記入し、主な論文 10 編程度 (三宅賞) 2 編程度 (奨励賞) をそえて、下記のあて先へ送付して下さい。
応募書類等は、三宅賞及び奨励賞選考のためにのみ選考委員会などで用いられます。

4. 締切日：2007 年 8 月 31 日

5. 地球化学研究協会ホームページ：<http://wwwsoc.nii.ac.jp/gra/>

6. 応募先：〒100-8212 東京都千代田区丸の内 1-4-5

三菱 UFJ 信託銀行リテール受託業務部公益信託グループ

(公益信託) 地球化学研究基金 江川康治

7. 問合せ：地球化学研究協会事務担当まで、電子メールでお願いします。

E-mail: t-sagi@ka5.koalanet.ne.jp

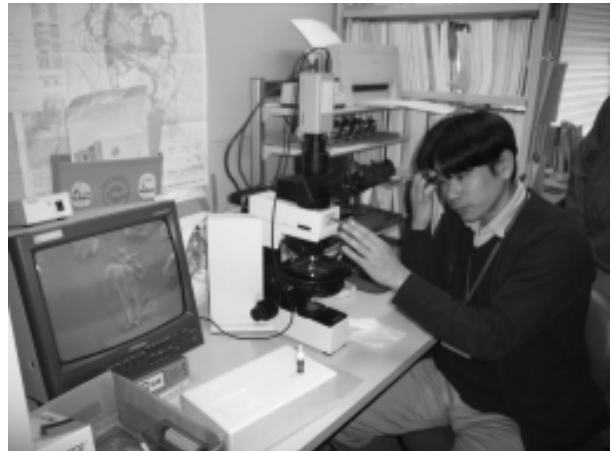
日本第四紀学会第11回講習会「火山灰層を用いた調査法・分析法」に参加して

本学会第11回講習会が、2007年1月27日(土)、28日(日)の2日間にわたって滋賀県大津市堅田地域および琵琶湖博物館にて実施された。今回の講習会は、里口保文(琵琶湖博物館)、水野清秀(産業技術総合研究所)両氏指導のもと、両講師を含め総勢18名で行なわれた。

27日は、滋賀県大津市の堅田丘陵に分布する古琵琶湖層群堅田累層中に見られる栗原火山灰層、佐川、佐川、佐川火山灰層を順に観察した。初めに訪れた栗原火山灰層の露頭では、里口氏より栗原火山灰の解説や火山灰層の捉え方についての説明を受けた。今回の講習会は火山灰を専門にしていない方を対象にしていたこともあり、地形図への調査地点の記入のしかた、層相の記載、火山灰資料の採取、柱状図の作成といった基礎的な部分から丁寧に指導頂いた。例えば、サンプルの採取の仕方に関して、平行葉理中ではサンプルを採取することは望ましくないと教わった。これは、栗原火山灰層では、明瞭な平行葉理が観察されることから、この部分は流されてきて堆積したと考えられ、流下する際に他の鉱物を取り込み鉱物組成が変化している可能性があるためとのことであった。

以上のような基礎知識を教わったのち、佐川、佐川の露頭を観察した。この3露頭は、世渡川という小川沿いにある。佐川、佐川の露頭へ向かう際、長靴を履いて小川を歩いた。私は途中、川の深みに足を突っ込んでしまい、冬の川の水が長靴の中に入ってしまおうというハプニングに見舞われてしまったが、フィールドワークの楽しさを改めて感じた。

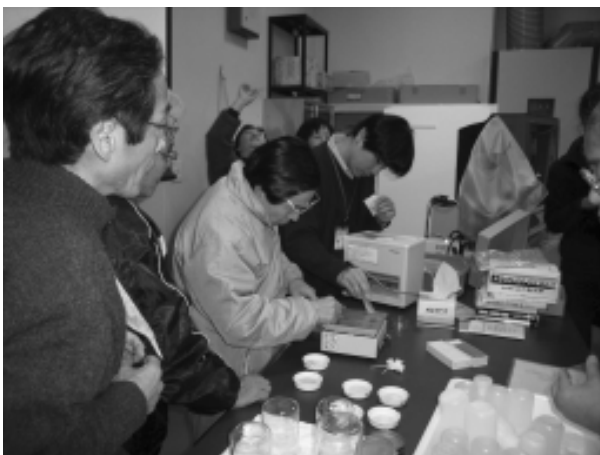
全ての露頭において、参加者の方々は熱心に説明を聞き、サンプリングでは皆が露頭に張



屈折率測定装置を前に、使用方法を説明する講師の里口保文氏 水野清秀氏撮影

り付くように一生懸命サンプルを採取されている姿が印象的であった。また、露頭を前に、参加者の方々が講師の里口氏、水野氏に質問をし、熱い議論をされている姿も多くみられた。初日の日程が終了したのち、堅田駅近くの喫茶店で懇親会も実施され、参加者同士の親睦がより深まった。

翌28日は琵琶湖博物館にて、27日に採取してきた火山灰の分析を行なった。午前には3班に別れて、里口氏より火山灰の洗浄、プレパラート作りといった火山灰分析のための前処理の仕方を教わったのち、各班で実習を行なった。今回の篩い分けには60メッシュと235メッシュを用いたが、慣れないせいか思ったより235メッシュを水が通らず、オーバーフローさせてしまうこともあった。このように苦戦しつつも取り出した火山ガラスや軽鉱物、重鉱物を偏光顕微鏡で観察した。石英と長石や斜方輝石と単



顕微鏡観察するためにプレパラートを作成しているところ 水野清秀氏撮影



偏光顕微鏡を用いて、火山灰層の構成鉱物を観察する参加者 水野清秀氏撮影

斜輝石の見分け方などは、実際に顕微鏡を覗きながら両氏より教わることができ、非常に分かりやすかった。

午後は各班順番に火山ガラスの屈折率測定を行ない、その間ネオジム磁石を用いての重鉍物分離を行なった。今回の屈折率測定では、里口氏指導のもと温度変化法で行なわれ、実際に自分でベッケ線が見えなくなった温度で屈折率を決定するという体験をさせて頂いた。一方、重鉍物分離では水野氏に指導して頂き、角閃石や斜方輝石、不透明鉍物といったものを抽出し、偏光顕微鏡で観察した。この時も、水野氏から

丁寧な解説をして頂き、それをもとに班内で議論することができた。

今回の講習会では、火山灰の採取から分析までを一貫して教わることができ、非常に実用的なものであった。普段、分析をすることが少ない参加者にとっては新鮮な体験であったように思う。最後に、講師をして頂いた里口氏、水野氏、さらに参加者の方々に、あらためてお礼申し上げる。

駒澤大学 文学部地理学科 地域環境研究専攻
3年 中村 優太

日本第四紀学会シンポジウム「自然史研究におけるフィールドの活用と保全」報告

日 時：2007年2月3日(土)13:00～17:00

場 所：日本大学文理学部図書館3階オーバルホール

出席者：約80名

世話人：水野清秀・遠藤邦彦・久保純子

昨年夏の50周年記念大会では「南関東の第四紀主要サイトをめぐる」という巡検を実施し、野外調査フィールドをどうやって将来に伝えるか、という問題が議論されました。そして、会員だけでなく多くの市民の理解を得るためには、動植物をはじめ地形、地質、考古情報などを含んだ「土地」が、野外研究の場や自然とふれあう場であることを訴えることが重要なのではないかと考えました。

そこで、今回のシンポジウムでは『日本の地形レッドデータブック』著者でもある小泉武栄会員、テフラ研究者かつ都立高校地学教員の田村糸子会員、海外で先行しているユネスコの「ジオパーク」の日本での設立推進委員会の渡辺真人氏(産総研)、文化財保護行政の中で天然記念物を扱う文化庁文化財部記念物課の桂雄三氏、横浜市の「瀬上の森」で活動を続けている「瀬上の森パートナーシップ」の中塚隆雄(フィールドネーム;チャーリー)氏に、それぞれ講演をお願いしました。以下、内容紹介とともに当日の会場の雰囲気をお伝えします。

はじめに、小泉武栄会員(東京学芸大学)「地学野外観察の推進とフィールドの保全」では、野外巡検の魅力が写真を使いながら紹介され、地学・自然地理学離れを打開するためには、小学生から社会人まで、地球や自然のすばらしさ

と感動を伝えて、地球に生まれてきたことの幸せを感じさせ、ファンを増やそうという呼びかけがされました。

次に、田村糸子会員(東京都立若葉総合高校・首都大学東京大学院)「高等学校における地学野外学習の現状と問題点」では、東京都を中心とした公立高校の地学教員を対象にアンケートを行った結果、対象校の58%で地学野外実習を実施し、生徒たちも「教室で学んだことが実際に野外へ行って理解でき、興味を持てた」と回答したことなどが紹介されました。このような地学教員の積極的な取り組みにもかかわらず、全国の約7割の高等学校では地学の授業が開講されていない上、地学の教員が採用されない、という危機的状況が述べられました。

次の渡辺真人氏(産総研)「ジオパーク：地質遺産を用いた地球科学の普及と地域振興 - 世界のジオパークの例と日本での推進活動 - 」では、ヨーロッパや中国など海外の事例紹



シンポジウム会場風景 山口正秋氏撮影

介とともに、「ジオパーク」の推進により、新しいスタイルの旅行ができ、地域振興に貢献し、地球科学の理解が進み、安全で持続可能な社会が実現され、地球科学の研究もすすみ、退職後も幸せな人生が送れる、「ジオパークでみんな得しよう」と高らかに謳い上げられました。

続いて、桂 雄三氏（文化庁）「天然記念物指定の意味」では、天然記念物は地域の歴史や暮らしと密接に関わり、あるいは災害の記憶を伝え、また地域の知恵を継承するシンボルであるという説明がされました。地球を形成する地殻、気候、地形地質、動植物、ヒト、そして歴史、文化、暮らしに関わるプロセスがすべて文化財であり、具体的に天然記念物によりさまざまな地域のストーリーが語られました。

チャーリーこと中塚隆雄氏（瀬上の森パートナーシップ）「谷戸の景観を守る市民運動の事例」では、昨年夏の巡検でも訪れた横浜の「瀬上の森」で、里山、ホタル、谷戸田、江戸時代の水利施設、古墳時代以来の製鉄遺跡、そして160万年前の貝化石、と多面的な魅力と意義が明らかにされてきたこと、観察会や勉強会を続けるかたわら、開発計画に対し説得力のある発言をおこなっている様子が紹介され、「ホタルを守る」、「露頭を守る」だけでなく、地域の特性を大事に、多面的にフィールドをとらえる

ことの重要性が主張されました。

会場全体がこれまでのシンポジウムとはちょっとちがう、大きな盛り上がりを感じさせる雰囲気になりました。最後の総合討論でも、学校教育での野外活動や博物館の活動、行政や市民などさまざまな視点から、会場からも活発に意見が述べられました。自然史研究におけるフィールドの活用と保全に関し、ストーリー性のある内容、ネットワークの大切さなど、重要な指摘がされたのではないかと思います。

第四紀学会としても、もともと多くの分野をカバーする学会であり、バラエティのあるテーマで講習会などを工夫し、会員だけでなく一般の人々にもアピールし、連携していきたいと思えます。

心を揺さぶる講演をしてくださった各講演者の方々、会場準備でお世話になりました日本大学の学生、院生の皆様、そして活発な議論に参加くださった出席者の皆様にお礼申し上げます。

なお、シンポジウムの要旨集残部が若干ございますので、ご希望の方は学会事務局までお問い合わせください（送料込み1部500円）。さらに、今回の内容は機会を改めまして印刷物としてより多くの方々にお伝えするつもりです。

（世話人 久保純子）

2007年会員名簿の作成のお知らせとお願い

本年は3年毎に発行している会員名簿作成の年となります。個人情報保護の観点から、幹事会および評議員会にて発行の有無も含め議論を行いました結果、従来どおり発行することになりました。

4月上旬に、現在事務局にあるデータを出力して各会員に郵送しますので、掲載内容と名簿掲載可否の回答をお願い申し上げます。その際、個人情報の使用について同意いただく項目も設けております。また、期日までに返信がない場合は、掲載に同意いただいたものとして登録されている情報を掲載する予定です。

会員名簿は8月に完成する予定です。個人情報保護法施行により、発行・印刷に際しては名簿にシリアルナンバーを印刷して皆様にお届けいたしますので、販売・譲渡なきようお願い申し上げます。

「日本第四紀学会賞」、「日本第四紀学会学術賞」と「日本第四紀学会功労賞」新設について

日本第四紀学会50周年記念事業の一環として昨年度から検討してきました学会賞に関して、2月に行なわれました評議員会において「日本第四紀学会賞」「日本第四紀学会学術賞」と「日本第四紀学会功労賞」が新設されました。2007年度から推薦と選考が行なわれ、2008年大会から授賞が行なわれる予定です。2006年度から「日本第四紀学会論文賞」と「日本第四紀学会奨励賞」が始まっていますが、今回の3つの賞の新設によって、50周年記念事業関連の顕彰規定の新設と改定作業を終えることとなります。

新たに設けられた各賞の概要は以下の通りです。詳細は、評議員会資料の学会賞検討委員会からの報告と関連規定と内規をご覧ください。

日本第四紀学会賞(以下学会賞)は、第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動、及び学会活動に貢献した会員に授与し、学会における最高の賞とする。

日本第四紀学会学術賞(以下学術賞)は、第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた会員に授与する。

日本第四紀学会功労賞(功労賞)は、第四紀学の発展や学会活動に貢献した個人や団体、組織に授与する。

学会賞と学術賞は、学会賞受賞者選考委員会が会員から推薦された候補者の中から選考し、また功労賞は幹事会が候補者を推薦し、評議員会において受賞者を決定する。

授賞式は総会で行い、学会賞、学術賞、功労賞受賞者へは賞状を授与する。学会賞と学術賞の授与は、原則として毎年とし、それぞれ若干名とする。功労賞の授与は原則として2年ごととし、授賞数は若干名とする。

また、これらの改定に伴い、論文賞と奨励賞の選考も、選考委員会での決定から受賞候補者の選考に変更になり、受賞者は評議員会で最終決定されることになりました。更に名誉会員についても、5年毎に名誉会員候補者選考委員会を設けることができるという表現から、設けるという表現に改訂されました。

新設されたこれらの賞を生かし、日本第四紀学会が更に発展しますよう会員の皆様のご協力をお願い致します。

日本第四紀学会会長 町田 洋

2006年度第2回評議員会議事録

日時：2007年2月3日(土)10:30～12:30
場所：日本大学文理学部百周年記念館2階会議室
議長：大場忠道

出席者：町田 洋(会長)、真野勝友(副会長)、犬塚則久、上杉 陽、岡崎浩子、奥村晃史、公文富士夫、小泉武栄、斎藤文紀、鈴木毅彦、辻 誠一郎、陶野郁雄、長友恒人、兵頭政幸、水野清秀、宮内崇裕(以上評議員)、遠藤邦彦(幹事)、山崎晴雄(50周年記念事業実行委員会)、久保純子(記録)、委任状15通

遠藤行事幹事の司会で町田会長挨拶に続き、大場忠道評議員が議長に選出され、定足数確認の後、以下の報告と審議がおこなわれた。

[報告事項]

2006年度事業中間報告

1-1 庶務(久保幹事)

(1)会員動向(2006年12月31日現在)

正会員1650名(うち、学生会員46名、海外会員20名を含む)、名誉会員13名、賛助会員11社、総計1674。(2005年12月31日現在正会員1660名、名誉会員4名、賛助会員12社、団体購読会員94団体)。団体購読会員廃止に伴う一般購読への移行が完了した。土 隆一評議員の名誉会員推薦に伴い評議員が1名減ったが、残り任期1年以内のため補充はおこなわない。

(2)2006年度第1回評議員会を2006年8月4日に首都大学東京において開催した。議長：石橋克彦

2006年度総会を2006年8月5日に首都大学東京において開催した。議長：小泉武栄。これらの詳細は、議事録として第四紀通信13巻5号に掲載した。

(3)引用許可の受付、会員名簿整理、寄贈図書の手付を行なった。

(4)学会・シンポジウム・講演会等の共催、後援：北海道開拓記念館「北の縄文」特別展(後援)2006年10月27日(金)～12月3日(日)、IYPEシンポジウム「国際惑星地球年2007-2009(協賛)2007年1月22日(月)東京大学理学部

(5)知的財産権等に関する検討委員会(継続)と学会賞に関する検討委員会各委員を委嘱した。

(6)2007年日本第四紀学会論文賞および奨励賞(新設)選考に向けて、論文賞選考委員の選挙を行なった。町田会長から推薦された11名の候補者に対して、評議員による選挙を行なった結果、以下の5名が候補者として選出された：松島義章、海津正倫、中村俊夫、樽野博幸、松下まり子、(次点)山崎晴雄。また、会員に向け候補者の推薦を依頼中である。

(7)日本学術振興会へ科研費審査委員候補者情報提供にあたり、評議員へ地質学、地理学、考古・人類・土壌、古生物・動植物、その他(地物・地化・工学)各分野について推薦(投票)を依頼した結果、すでに情報提供をおこなった方を除く上位6名(河村善也、中村俊夫、小野昭、陶野郁雄、百原新、小泉武栄各会員)を候補者に選出した。

(8)選挙管理委員として及川輝樹、大石雅之、奥田昌明、工藤雄一郎、竹下欣宏、宮地良典各会員を委嘱することとした。

1-2 編集(岡崎幹事)

(1)第四紀研究第45巻5号(特集号「汽水域における完新世の古環境変動 - 自然環境の変遷と人為的変化による環境変化」：原著論文7編、108ページ)、6号(原著論文4編、短報1編、70ページ)、第46巻1号(原著論文4編、資料1編、書評1編、81ページ)刊行済。

(2)特集号の状況：50周年大会シンポジウムは第46巻3号を予定。

(3)投稿状況：受理済み論文は9編で第46巻2号以降に順次掲載の予定である。また、手持原稿は28編(原著論文：17編、短報：6編、総説：3編、資料：1編、討論1編)である。また、この中には「地震・津波関係」と「大都市の地盤(昨年1月のシンポジウム)」など特集原稿12編を含む。論文投稿数は、2006年は43編で、2005年は55編と減少傾向が引き続いている。

(4)保証書・著作権等譲渡同意書の提出：2007年1月1日から新しい投稿規定に基づいて保証書・同意書の提出が必要となる。第46巻1号掲載分からこれらの提出を求めている。保証書、新しい送り状(書式を一部変更)はHPからも入手可能になっている。

(5)電子ジャーナル：J-STAGE(科学技術振興機構が運営する電子ジャーナルサイト)利用の準備を進めている。第45巻分だけは先方負担で電子化される。早ければ、5月ぐらいから閲覧可能。第46巻

からは学会費で電子化の予定である。

(6)依頼原稿の区分：特集号(大会シンポジウム)・特集原稿についての「依頼/通常原稿」の区別について検討した。「特集号」については、特集号編集委員会に「依頼/通常」の区分案を編集幹事に出してもらい、編集委員会で決定する。依頼原稿は、会員/非会員のどちらについても認める。「特集」については、「通常論文扱い」とのこれまでの説明から、依頼原稿扱いはないものとする。ただし、非会員の原稿(著者に会員が一人もいないもの)については、依頼原稿にせざるを得ない。これが超過ページになった場合にするかは編集委員会で審議する。

(7)その他：最近、規定枚数を大幅に超過する論文や受理までに時間のかかるもしくは掲載不可の論文が増えてきている。それによって編集委員会の負担も増加している。また、今後は保証書などの確認やJ-STAGE利用の伴うデータの確認などさらに作業が増えることが予想される。会員へは「編集委員会だより」などで完成度の高い論文の投稿を呼び掛けるが、今後編集委員の増加も検討したい。

以上の報告に対し、J-STAGEとの契約において著作権はどうなっているか(学会が所有)、非会員が投稿する場合も保証書の提出を求めるのか(求める)50周年大会シンポジウム特集号について等の質疑応答があった。

1-3 行事(水野幹事)

(1)日本第四紀学会2006年創立50周年大会を首都大学東京において、2006年8月4～6日に開催した。本大会は、50周年記念事業実行委員会による企画に基づいて実行され、テーマを「人類の環境を第四紀学から考える - 過去から見た現在と未来 - 」とした。3日間で4つのシンポジウム、「最終氷期から完新世への急激な環境変動と人類」、「鮮新・更新世の日本列島」、「過去の間氷期の研究から今後の地球環境の変遷を考える」、「環境問題・自然災害を第四紀学から考える」を実施し、計34件の講演が行われた(趣旨説明含む)。一般研究発表は、ポスター発表のみとし、3日間を通して66件の発表があった。このほか、4日には評議員会、5日には総会、50周年記念式典、会長講演「日本第四紀学会半世紀の歩みと展望 - 特に第四紀編年研究の進歩 - 」、50周年記念パーティーが行われた。大会参加者は365名(会員252名、非会員112名、不明1名)であった。また7～8日には、巡検「南関東の第四紀主要サイトをめぐる」が行われた。案内者は町田洋会長をはじめ総勢9名で、36名の一般参加者があった。多摩丘陵から横浜、相模原、大磯丘陵にかけての代表的な地層や遺跡地などを見学した。

(2)日本第四紀学会2007年大会の準備を、開催地である神戸大学の関係者を中心に進めた。開催期間：2007年8月31日(金)～9月2日(日)、開催場所：神戸大学百年記念館(兵庫県神戸市灘区六甲台町1-1)、日程：8月31日～9月1日 一般研究発表(口頭及びポスター)、9月2日 シンポジウム「瀬戸内海の変遷 - 自然、環境、人」(仮題)、なお、シンポジウムは全て指名講演の予定。このほか、9

月1日には一般市民を対象とした普及講演会「大地の変動と地震・津波」(仮題)が同じキャンパス内の滝川記念学术交流会館にて、また9月3日～4日には巡検が行われる予定。

(3)50周年記念国際シンポジウムを2007年11月につくば市の産業技術総合研究所で実施することを決め、50周年記念実行委員会と産業技術総合研究所とでその準備を進めている(詳細は50周年記念事業実行委員会報告参照)

1-4 広報(兵頭幹事)

(1)「第四紀通信」13巻5号(2006年10月)と13巻6号(2006年12月)を刊行した。同14巻1号(2007年2月発送予定)の編集、印刷を行った。

(2)「第四紀通信」13巻5号、6号と14巻1号を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載した。

(3)日本第四紀学会ホームページを通じて広報活動を行った。

(4)第四紀学会会員メーリングリストを通じて、シンポジウム、研究集会、公募等の広報活動を行った。

(5)日本第四紀学会ホームページにて、中高生、大学生、社会人を対象に第四紀学に関する質問を受け付けそれに対して専門家が回答する「だいよんきQ & A」という企画を新規事業として始めた。

1-5 渉外(奥村幹事)

(1)日本地球惑星科学連合:2005年10月12日、東京大学理学部で第4回評議会が開催され、新規加盟学会の承認、運営会議活動、日本学術会議活動について報告が行われた(日本学術会議INQUA小委員会報告参照)。2007年度予算案が承認された。吾妻 崇会員代理出席。

(2)日本地球惑星科学連合2007年大会:第四紀学会が提案するレギュラーセッション「第四紀」と、地震学会・地質学会と共同提案のレギュラーセッション「古地震と活断層」が引き続き開催される。さらに「沖積層研究の新展開」を共同コンペーナとして新たに開催する。会期:2007年5月19日(土)～24日(木)、会場:幕張メッセ国際会議場。各種オンライン手続きの日程は、予稿集原稿:受付開始1月10日 早期締切:2月7日、最終締切:2月14日。大会参加登録:受付開始 1月10日 締切 4月13日。投稿、受付登録等は、すべて合同大会公式web site(<http://www.jpгу.org/meeting/2007reg.html>)で行う。

(3)自然史学会連合:2006年11月12日に自然史学会連合講演会「教科書で学べない自然史」が神奈川県立生命の星・地球博物館で開催された。会場では加盟学協会を紹介するポスター展示が行われ、日本第四紀学会を紹介するポスターを掲示し、生命の星・地球博物館所属の会員によって説明が行われた。2006年12月9日に国立科学博物館で2005年度総会が開催された。講演会の開催、シンポジウム共催、博物館部会、ホームページの維持管理、会費値上げ問題、日本学術会議協力学術研究団体登録についての報告に続いて、2005年度決算、2006年度

会計経過報告、2007年度予算案、運営委員・役員、および運営規則の改定について審議承認された。

(4)国際惑星地球年(IYPE):2007年1月22日に東京大学理学部小柴ホールで、IYPEシンポジウム「国際惑星地球年2007-2009」開催式典が催された。国際惑星地球年本部事務局長 E. de Mulder氏、ユネスコ生態・地球科学部 R. Missotten氏ほか国内関連機関の代表の講演と祝辞があった。今後、日本IYPE実行委員会を立ち上げて活動を本格的に実施する予定である。

1-6 企画(水野幹事)

(1)第11回講習会「火山灰層を用いた調査法・分析法」を2007年1月27～28日に滋賀県において実施した。講師は里口保文・水野清秀両会員で、16名の受講者があった。27日は堅田丘陵の露頭において、柱状図の作成、火山灰層の観察・記載、サンプリングなどの実習を行った。また28日は琵琶湖博物館にて火山灰の処理、火山ガラスの分類、構成鉱物の同定、屈折率測定などの講義及び実習を行った。

(2)第12回講習会「貝化石群集を用いた古環境の復元法」を企画し、その準備を進めた。期間は2007年3月10～11日で、講師は松島義章・田口公則両会員である。10日は横浜市下飯田遊水地内の露頭で、貝化石を含む地層の観察、サンプリング等を行い、11日は神奈川県立生命の星・地球博物館において化石のクリーニング、同定などの実習、古環境復元の講義などを行う予定である。

(3)学会主催のシンポジウム「自然史研究におけるフィールドの活用と保全」を2007年2月3日午後日本大学文理学部にて開催する計画をたて、その準備を進めた。世話人は水野清秀・遠藤邦彦・久保純子会員で、野外観察の推進、フィールドの保全、学校教育、ジオパーク構想、天然記念物指定、市民運動などに関する5つの講演が予定されている。

2. 2006年度会計中間報告

鈴木幹事より、資料1(省略)にもとづき、予定通り執行されている旨説明があった。

3. 知的財産権等に関する検討委員会中間報告(上杉委員長)

(1)委員会構成と開催日時:上杉 陽(委員長)、阿部祥人、池原 研、遠藤邦彦、坂上寛一、真野勝友
第1回委員会 2006年11月24日(金) 日本大学文理学部、第2回委員会 2007年1月20日(土) 日本大学文理学部

(2)幹事会からの諮問事項(要旨):

2007年1月1日から実施される日本第四紀学会出版物等利用規定に対処するため、「保証書」、「著作権等譲渡同意書」、「転載許可申請書」、「転載許諾委任状」の受付、承認などの業務を、どのように行うか。

現在の利用規定では「第四紀研究」のみが対象だが、今後の予稿集や第四紀通信、作成中のCD出版

物の扱いをどうするか。

規定の施行に伴って、直ちにこれにかかわる細則（罰則など）を準備する必要があり、法務関係の常置委員会が必要かどうか。

(3) 検討結果

検討事項1：諮問事項になかった「幹事長名ないしは会長名の声明」については、既に本委員会でも討論し、その意見分布は既に幹事長宛にも配信されているので、後は幹事会として総合的に判断して頂きたい。

検討事項2：諮問事項 に関する本委員会の見解は既に幹事会宛に配信されている。

検討事項3：1) 50周年記念特別企画「デジタルブック最新第四紀学」の著作財産権問題。先行して倫理憲章に基づいて企画が進み、「日本第四紀学会出版物など利用規定、保証書、著作権譲渡等同意書、転載許可申請書及び許可証、転載許諾委任状」を準用して進められてきた。今後の適用のあり方に関して討論し、弁護士の見解を受けて、CD委員会から成案を幹事会および評議員会に提案することとなった。2) 講演要旨の著作財産権確立。諮問事項中の「本会著作財産」中の「第四紀研究」以外への「日本第四紀学会出版物など利用規定等」（「日本第四紀学会出版物など利用規定、保証書、著作権譲渡等同意書、転載許可申請書及び許可証、転載許諾委任状」）の適用のあり方については、順次、検討を進めるが、本委員会としては、講演要旨への適用のあり方から検討を進めることとし、2月3日評議員会には概要を中間報告として提示し、8月評議員会で成案を提示することとした。

検討事項4：法文としての妥当性の再検討を踏まえた会則や諸規定・細則の改訂問題 先に2006年8月4日評議員会で2005年度知的財産権等検討委員会答申案を承認した際に、「とりあえず承認するが、弁護士などの専門家のご意見を伺い、訂正すべき箇所などがあつた場合は、次期評議員会にかける」という条件付きで承認されている。そこで、第二回委員会には、後半から高木宏行弁護士（日本地質学会顧問弁護士）に出席をお願いして、この点の検討をお願いした。時間が不十分であり、すべてにお答えいただけたわけではないが、既に、いくつかの箇所で見解があることが判明している。こうした点をまとめて、次期評議員会に訂正案を出せるように努力することとなった。

検討事項5：法務関係の常設委員会の設置は避けがたい情勢と判断する。特に、会則第7条に、除名に関する項を付加すると、除名を受け入れない会員の異議申立を受けることとなり、仲裁裁定を出す機構の設置などが必要となり、経験豊富な委員は必須となる。

4. 学会賞検討委員会報告（陶野委員長）

学会賞検討委員会を大場忠道・公文富士夫・小泉武栄・松浦秀治・陶野郁雄の5名の委員に斎藤文紀幹事長を加えて下記の2回開催した。

第1回：2006年12月18日（月）午前10時から早稲田大学西早稲田キャンパスにおいて

第2回：2007年1月29日（月）午後2時から

お茶の水女子大学において

第1回目の会合では、幹事会からの資料に基づき、学会賞としてどのようなものが相応しいか、その内容をどのようなものにするか等について検討した。それを踏まえて、それぞれ何年に1回とするか、受賞件数はどの程度が適当であるか、選考委員会をどうするか等について議論した。第1回目終了後は、メールで意見交換を行った。

第2回目の会合では、それぞれの賞の規定に関することを検討した。そして、別紙（略）に示す規定・内規について意見の一致をみたので、ここに答申する。

改定内容については、審議事項および本号の案内を参照。

5. 50周年記念事業実行委員会報告（山崎事務局長）

委員会構成：熊井久雄（委員長）、町田 洋、真野勝友、斎藤文紀、岩田修二、小野 昭、松浦秀治、松島義章、河村善也、渡邊真紀子、御堂島 正、遠藤邦彦、杉山雄一、鈴木毅彦、久保純子、中村俊夫、水野清秀、吾妻 崇、奥村晃史、大場忠道、池原 研、佃 栄吉、山崎晴雄（順不同）

(1) 2006年8月の総会以降、2007年1月末までに5回の実行委員会を開催し、2007年11月の国際シンポジウム、募金活動、記念出版物、博物館連携などの諸事業の企画及び推進を行った。

(2) 国際シンポジウムは2007年11月20～22日に茨城県つくば市の産総研共用講堂で開催する。日本の第四紀研究を世界へ展開させるために、そして、アジア・西太平洋地域の第四紀研究との連携をはかるため、タイトルを“International Symposium on Quaternary Environmental Changes and Humans in Asia and the Western Pacific”「アジア・西太平洋の第四紀 - 環境変化と人類 - 」と設定し、アジア各国・各地域の研究者およびINQUAの代表的研究者を招いて21世紀にふさわしいシンポジウムを開催する。なお、開催日程はAGUとのバッティングを避けるため、11月20～22日（19日から受付開始）に変更した。

(3) シンポジウムの内容は代表的な研究者によるキーノート講演（3～4講演）と6つのセッション（第四紀中・下部境界問題、後期旧石器、インドネシアの初期人類、西太平洋とその縁海、沿岸及び海面変動、アジアの地震・火山と地形変動：各半日、一部セッションは2会場で同時開催）を行う。各セッションの講演は招待講演を主とし、公募する一般講演はポスター発表とする（但し、対応はセッション毎に異なり、オーラル発表を募集する場合もある）。招待講演者については各セッションのオーガナイザーが交渉中である。また、巡検等は各セッションが独自に計画・実施する。

(4) シンポジウムの英文案内（ファーストサーキュラー）を作成した。インターネットを通じて公開する。また、4月には一般発表の公募などを含むセカンドサーキュラーを公開の予定である。

(5) 2006年8月に実施した国内シンポジウムは奥村晃史会員を編集委員長、各セッションのコンビーナを委員とする特集号編集委員会を組織し、編集作

業を開始した。この特集号は英文論文とし2007年7月のINQUA大会(オーストラリア・ケアンズ)に日本の成果として提出できるよう作業を進める。関連して、奥村晃史会員を創立50周年事業実行委員会の委員に加えた。

(6)国際シンポジウムは独立行政法人産業技術総合研究所と共催することが決まった(資料2省略)。また、日本における国際惑星地球年(IYPE)事業の一環と位置づけられる。シンポジウムの運営・実施のため産総研内に国際シンポジウム実行委員会(委員長:佃 栄吉)を設置の予定である。

(7)募金事業:2006年2月から開始した募金事業はほぼ1年が経過し、1月30日現在、募金者数292名、募金総額は3,252,000円(目標額500万円の65%)に達した。しかし、CD作成費などで1,295,967円の経費がかかっており、使用可能額は1,956,033円である。募金に協力頂いた方のリストを別紙に示す(資料3)。多数の方々に応募頂いたが募金額はまだ目標に達しておらず、現状では海外からの招へい者の旅費・滞在費確保が困難な状況である。今後、募金呼びかけをさらに強めるとともに、科研費、民間助成金などの獲得に努力する必要がある。

(8)上記に関連して、11月に19年度科研費の研究成果公開促進費「研究成果発表(C)」を申請した。また、本シンポジウムに関連した外国人研究者の招へいを含んだ科研費申請を各オーガナイザーが実施している。この他、民間研究助成について応募を行うこととしている。

(9)博物館連携:連携事業として豊橋市自然史博物館、兵庫県立人と自然の博物館、産総研地質標本館、大阪市立自然史博物館では、コーナーを設けてもらい日本第四紀学会のポスター展示(会長挨拶、第四紀学会の説明、第四紀学関連の写真、学会関係出版物等の展示)を順次数々月ずつ実施した。今後も事業を継続し、神奈川県立生命の星・地球博物館などで展示の予定。

(10)50周年第四紀電子出版編集委員会(CD出版):CD出版物「デジタルブック最新第四紀学」は原稿提出が終わり、編集作業及び転載許諾に関する作業を実施中である。5月の地球惑星連合同大会での販売をめざして作業を実施中である。販売は会員は第四紀学会事務局取り扱い(郵便振替用紙による申込)で割引価格2000円、一般販売は丸善取り扱い(単行本登録扱い)で販売価格3000円となる。

(11)2004年に実施した第四紀研連主催のシンポジウム「地球史の現代と近未来 - 自然と人類の共存のために」を、日本第四紀学会50周年記念出版物として東京大学出版会より刊行する。現在校正中である。

6. その他

6-1 日本学術会議 地球惑星委員会国際対応分科会 INQUA 小委員会報告(奥村委員長)

(1)2006年10月4日に日本学術会議において、第1回INQUA小委員会を開催した。日時:2006年10月4日(水)午後1時~4時30分、場所:日本学術会議6C(3)会議室、出席者:碓井照子(会員)、太田陽子、奥村晃史(連携会員)、小野 昭、熊井

久雄、斎藤文紀、町田 洋、欠席:多田隆治。

議事

自己紹介の後、互選により奥村連携会員を小委員会委員長とした。

2名の欠員に関して議論を行った結果、定数増も念頭に入れて小委員会委員を検討した。関係する連携会員や若手研究者を検討し、田村俊和、三上岳彦、渡邊真紀子、横山祐典、鈴木毅彦氏ほかを候補として、奥村委員長が打診することになった。なお任期は第20期の任期と同じ、平成20年(2008年)9月30日までである。

第17回INQUA大会(Australia, Cairns)への代表派遣の選考を行った結果、斎藤文紀委員が選出された。

INQUA執行部への役員推薦に関しては、職務内容を検討した結果、副会長に日本から1名推薦することになった。名誉会員の推薦に関しては、各大会において各国から原則1名の推薦が可能である。今回の推薦については、次回の会合で議論することになった。

地球惑星科学委員会の分科会に関しては、現在発足している「地球・惑星圏分科会」「地球・人間圏分科会」に対して碓井会員から現状の紹介があった。またこれ以外に全員が参加できるような地球惑星推進分科会を新たに設ける議論や、国際対応小委員会の一部を分科会に格上げするかどうか等の議論が行われていることが紹介された。INQUA対応小委員会としても、他の小委員会と合同分科会の設立が可能かどうか、奥村委員長を中心に様子を見て検討することになった。

平成18年度の代表者追加派遣については、INQUAのTerrestrial Processes, Deposits, and History委員会主催の会合が2007年3月5-9日にベネズエラで開催されることが紹介され、奥村委員長が推薦され、申請することになった。

今後の小委員会の活動としては、小委員会の名称を冠したシンポの開催や出版物をだすことはできないが、地球惑星科学委員会の承認を得れば、同委員会の名称で可能であること、海外との関係に関しては、従来通り行うことが確認され、National Committee on Quaternary Research (chairman: Koji Okumura, 他各委員)としてINQUA執行部に奥村委員長から連絡をすることになった。INQUAへの分担金については、今後2年間は継続されるとの感触を得ていることが奥村委員長から紹介された。小委員会の今期の活動としては、現在準備中の第四紀研究特集号(INQUA対策号)を奥村委員長を編集代表者として継続して推進すること、来年度に産総研で開催される国際シンポを推進することが確認された。

その他:太田委員から次回のINQUAに関して組織委員長のJohn Chappell氏から要望などの問い合わせが紹介され、シンポ提案の要望を各Commission, sub-commissionに組織委員会から問い合わせたいとの要望が熊井委員から出され、太田委員から組織委員会に連絡することになった。

次回会合は、1-2月に19年度の代表者派遣の推薦依頼があることから、通例1月末に行われる日

本第四紀学会のシンポに合わせてか、緊急を要する場合は幹事に合わせて行うことになった。

(2) 日本学術会議地球惑星科学委員会国際対応分科会(第20期・第3回)報告(要旨):日時 2006年12月6日、場所 日本学術会議6階 議題

小委員会の活動状況:10月4日のINQUA小委員会について報告し議事録を提出。

平成19年代表派遣候補者の推薦等について:1月12日締め切り。1会議に最大3名。優先順位をつけて申し込むこと。

今後の分科会の構成について:地球惑星科学委員会での国際対応の方針、<1>国際対応組織の改革、i)ICSUのユニオンで、ii)分科会構成可能な既存の国際対応小委員会を分科会とする(IUGG, IGU, IUGS, INQUA)。<2>組織改革の方向:個別分科会を統括する幹事組織を設置する。<3-1>小委員会・分科会の活動で国際委員会・幹事会の決定を受ける必要のある案件については、予め地球惑星科学委員会の了解を得ること。<3-2>19年度新規特任連携会員は各組織2名まで推薦できる。派遣は別途。<3-3>小委員会・分科会議事録を連合ホームページに掲載すること。

その他:国際学术交流について。全般の規定は<http://www.scj.go.jp/ja/scj/kisoku/08.pdf> 事業のうち、団体加入・団体派遣・国際会議主催等を国際分科会が掌握する。団体加入について、「新規の可能性は全く無いわけではない」。新しい国際委員会委員長は団体加入の見直しを主要な任務とする可能性あり。基準 事務局:適正な会計処理、委員会:国際的発信力、会長・有力役員存在、組織運営上の影響力。代表派遣 一つの会議最多で3名(役員含む4名まで)。同一年度内1回限り。国際会議主催 年8件 10-15百万。前々年度11月末までに申し込み。閣議了解必要。IYPEシンポジウム、IPYシンポジウムの案内。

(3) INQUA小委員会におけるメール審議と対応:平成19年度派遣代表として、斎藤文紀代表、熊井久雄(層序年代委員会)、奥村晃史(地表プロセス研究委員会)をこの順位で日本学術会議に推薦した。2007-2011年INQUA役員(副会長)候補推薦は人選が難航したが、奥村晃史を推薦することとした。

(4) 平成18年度追加派遣:2007年3月2-13日奥村晃史のベネズエラ派遣が採択された。

(5) INQUAへの情報発信等:新しいNational Committeeの発足と連絡先をINQUA執行部全員に伝えた。2007-2011年のCommission Memberの推薦をINQUA執行部と各Commission委員長に対して行った。2004、2005年の分担金に関わるINQUA会計書類の不備が解決された。

(6) 地球惑星委員会INQUA分科会設立に向けて:上記国際対応分科会で承認された、ICSUユニオン対応の4つの小委員会が分科会への格上げされることに対応して、INQUA分科会設立申請書と碓井照子(会員)・田村俊和・三上岳彦・渡邊真紀子・奥村晃史(連携会員)を当初メンバーとする委員名簿を1月10日日本学術会議に提出して、2007年1

月22日現在幹事会の議決を待っている。10月の小委員会で委員の追加を決議した後、地球惑星委員会で小委員会から分科会への変更に関する議論が継続されたため、新たな委員の委嘱も分科会の発足もできず、活動は小委員会委員のメール審議だけであったが、幹事会の結論を待って活動が正常化できる予定である。2007年INQUA大会へ向けた活動を急ぎ始める必要がある。2007年1月25日開催の日本学術会議幹事会においてINQUA分科会の設置が申請通り認められた。

(7) 第17回INQUA大会(ケアンズ・オーストラリア):国際第四紀学連合(INQUA)第17回大会は2007年7月にオーストラリア・ケアンズで開催される。本大会はグレートバリアリーフに抱かれた熱帯のリゾートでオーストラリアと周辺地域の第四紀研究者との共同で開催される。日本から多数の研究者が参加して、研究発表、研究委員会活動、国際交流を推進することが期待される。発表申込みは1月末日で締め切られた。

(要確認)会期:2007年7月28日-8月3日、会場:ケアンズコンベンションセンター、ケアンズ、オーストラリア、登録料:2007年3月31日以前、一般:\$800、学生・退職者:\$585。2007年4月1日以降、一般:\$900、学生・退職者:\$685(\$:Australia Dollar、2007年1月4日の為替レート=94.35円)、エクスカッション:オーストラリア各地、ニュージーランド、パプアニューギニアなど。詳細はウェブサイトをご覧ください。大会ウェブサイト:<http://www.inqua2007.net.au/>

[審議事項]

1. 幹事会関係

(1) 論文賞選考委員は松島義章会員辞退のため、海津正倫、中村俊夫、樽野博幸、松下まり子、山崎晴雄(次点繰り上げ)の5名の就任が承認された。

(2) 選挙管理委員は及川輝樹、大石雅之、奥田昌明、工藤雄一郎、竹下欣宏、宮地良典の6名の就任が承認された。

(3) J-STAGEの利用について:非会員の場合、全文PDFへのアクセス制限を雑誌刊行後1年間とする(ちなみに抄録はフリー)という方針で承認された。幹事会からは会員のメリットを保持したいとの意向が示された。

(4) ホームページ「だいよんきQ&A」の実施案(資料省略)が審議され、質問が寄せられた場合は評議員の協力をお願いしたいこと、回答内容の著作権は本人に属すること等が確認された。

2. 各委員会報告に関する意見交換

(1) 知的財産権等検討委員会の答申に関しては、現在弁護士に相談中でもあり、会則改定案は夏までに作成したいとの補足があった。また、講演要旨集の著作権に関し、査読制として保証書の提出を求める等の議論を引き続き進めることとした。また、今後の対応のために常設の法務委員会を設置する方針が承認された。CD出版(編集集中)に対しては方針

は統一するができるだけ柔軟に対応することとした。評議員より、各研究機関ですすめている学術リポジトリ（研究成果を機関ごとにまとめて公開する）に対する対応について質問があり、これについては確認の上至急方針を決めることとした。

(2)学会賞検討委員会の答申を受け、幹事会より評議員会に規定および内規が提案され、承認された。承認された規定・内規は本号に別途掲載。

(3)50周年記念事業に関して、予算が厳しい状況にあり、来年度も今年度同様に事業対策費を計上して欲しいとの要望があり、その方向で検討すること

とした。

3. その他

個人情報保護法完全施行に関連して、名簿の発行をどうするかとの質問があり、会員の便宜のため会員名簿は発行する方針であるが、掲載事項について事前に全会員に確認する旨幹事会より回答があった。

以上で審議を終え、議長解任の上閉会した。

資料3

日本第四紀学会創立50周年記念事業 募金者芳名

増田耕一、熊井久雄、杉山富雄、三川憲一、金子 稔、水野篤行、松井 健、垣見俊弘、亀井裕幸、竹中 純、田中治夫、平井幸弘、古川博恭、千田 昇、大澤 進、松葉千年、満岡 孝、中島光世、今泉知也、青木賢人、三島弘幸、鹿島愛彦、桑島 達、鈴木 茂、野中俊夫、豊田和広、吉田 義、守田益宗、松橋義隆、木暮 翠、永井節雄、藤森孝俊、山崎晴雄、奥村晃史、菅 加世子、櫻尾重信、田辺 晋、勝田和利、東 将士、三田村宗樹、石井久夫、田口公則、久保純子、島口 天、井上公夫、辻誠一郎、古内栄一、吉川周作、小林武彦、山崎博史、沖津 進、杉村 新、長太伸章、佐藤裕司、荒井 格、植村善博、栗山知士、八千代エンジニアリング総業事業本部、半田久美子、黒田登美雄、兵頭政幸、能條 歩、田原敬治、小池一之、松浦秀治、北村晃寿、早田 勉、倉林三郎、伊藤ツヨシ、井上 弦、藤井昭二、松村 淳、和田温之、松島義章、楡井 尊、斉藤享治、西田和浩、飯島義雄、讃岐利夫、高田将志、長内優之、萩原法子、福岡孝昭、藤森雄一、町田 洋、水野秀明、上原克人、長友恒人、水野清秀、劔持輝久、池田 晋、山口啓子、浅川一郎、松井和夫、廣瀬玉紀、諏訪靖二、坂上寛一、片岡香子、小野弘道、渡邊眞紀子、野川 潔、杉山雄一、浅井朋代、松山澄久、上杉 陽、清水恵助、鈴木毅彦、石綿しげ子、原 芳生、奥野 充、小泉武栄、長橋良隆、小林忠夫、金沢直人、満岡 孝、陶野郁雄、楮原京子、檀原 徹、柏谷健二、真野勝友、星野フサ、会田信行、松下まり子、丹羽俊二、山縣耕太郎、遠藤邦彦、細矢卓志、河村善也、中村琢磨、岩田修二、矢島典夫、里口保文、中村俊夫、菊地隆男、神嶋利夫、五藤幸晴、幡谷竜太、鈴木郁夫、須藤忠恭、高遠 宏、大村明雄、清永丈太、近藤洋一、佐倉 朔、永塚鎮男、桑原拓一郎、佐々木俊法、野村 哲、田中正央、羽鳥謙三、大城逸朗、渡辺秀男、堀口萬吉、本郷美佐緒、白井太郎、磯 望、木谷幹一、小元久仁夫、犬塚則久、熊木洋太、古谷栄次郎、藤原 治、山田 哲、叶内敦子、神谷千穂、黒川勝己、門村 浩、小林巖、宮脇明子、高野武男、内山美恵子・高、赤羽貞幸、笹川一郎、中里裕臣、鈴木正章、小橋拓司、春恒社・中山五男、小野 昭、萩谷千明、森江孝志、近藤洋一、西山賢一、山本裕之、池原 芳、中川久夫、中川 猛、吉山 昭、山本 博、斎藤文紀、鎮西清高、成瀬 洋、池田重人、加藤芳朗、太田陽子、紀藤典夫、堀 和明、白石建雄、花岡正光、長岡信治、田中義文、及川輝樹、渡邊眞紀子、公文富士夫、北爪智啓、岡本 透、伊藤晶文、貞方 昇、前田保夫、平杜定夫、大場忠道、伊東徳治、苅谷愛彦、東郷正美、藤井理恵、菊地隆男、渡辺栄次、野口 淳、佐々木圭一、酒井治孝、豊蔵 勇、市川八州夫、百原 新、岡崎浩子、坂本順哉、馬場勝良、後藤秀昭、宇津川 徹、杉山真二、渡邊正巳、鈴木隆介、瀬川秀良、植木岳雪、小泉明裕、金 幸隆、創文印刷工業(株)、三好教夫、田村糸子、吉永秀一郎、林 和広、吉田明弘、渡辺哲也、吉田邦夫、杉田律子、石橋克彦、阪口 豊、菅 香世子、寺平 宏、川本素行、小林 詢、渡辺秀男、高瀬克範、松下利秀、加藤幸弘、細野 衛、吉羽興一、武藤 章、松田清孝、真鍋健一、新里忠史、竹下欣宏、長谷川 正、小松美加、福島和彦、中尾賢一、岡田篤正、田村 博、長岡大輔、中村由克、嵯峨山 積、松原彰子、山根幹生、滝口志郎、鳥居雅之、邑本順亮、田中俊廣、松井理作、藤岡比呂志、田村俊和、前島勇治、宮崎 隆、久保田郁夫、雁沢好博、安川豊史、能城修一、羽鳥謙三、小林健助、兼子尚知、近藤鍊三、三宅 尚、田辺晶史、武田裕一、糸魚川淳二、柳 信一郎、小島夏彦

50周年記念Tシャツ購入者、櫻尾重信、坂本隆彦、勝又麻須子、宮内崇裕

以上 299名

* 2007年2月27日現在

* お名前は募金時期の順に示しました。

* 同じお名前が複数回でてくる方がおられますが誤りではありません。

日本第四紀学会各種規定

日本第四紀学会 学会賞規定

(1994年8月26日評議員会, 8月27日総会, 1997年8月6日総会, 2006年8月4日評議員会, 2007年2月3日評議員会にて改正)

[目的]

第1条 本規定は日本第四紀学会会則第3条3項に基づき, 第四紀学の発展に貢献する優れた研究業績をあげた会員等の表彰に係わる事項を定める。

[賞の名称]

第2条 本学会に, 日本第四紀学会賞, 日本第四紀学会学術賞, 日本第四紀学会功労賞, 日本第四紀学会論文賞と及び日本第四紀学会奨励賞(以下「学会賞」, 「学術賞」, 「功労賞」, 「論文賞」と及び「奨励賞」と略称する)を設ける。

[授賞の対象]

第3条 学会賞は, 第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動, 及び学会活動に貢献した会員に授与し, 学会における最高の賞とする。学術賞は, 第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた会員に授与する。功労賞は, 第四紀学の発展や学会活動に貢献した個人や団体, 組織に授与する。論文賞及び奨励賞は, 会誌「第四紀研究」に掲載された第四紀学の発展や進歩に貢献する優れた論文を発表した会員である著者に授与する。奨励賞は若手研究者の育成と研究奨励に寄与することを目的とする。

[受賞者の選考]

(学会賞と学術賞)

第4条 学会賞及び学術賞候補者を選考するため, 学会賞受賞者選考委員会(以下「学会賞選考委員会」と略称する)をおく。

第5条 学会賞選考委員会は, 評議員の投票により選出された評議員経験が2期以上の5名の会員からなる学会賞選考委員で構成し, 学会賞選考委員の互選により学会賞選考委員長をおく。学会賞選考委員の任期は1年とし, 3期以上連続して就任できない。

第6条 本学会会員は, 学会賞選考委員会に対して学会賞及び学術賞受賞候補者を推薦することができる。

第7条 学会賞選考委員会は毎年6月30日までに選考を終了し, 受賞候補者を会長に答申する。学会賞選考委員会は必要に応じて参考人から意見を聴取することができる。

(功労賞)

第8条 功労賞の選考は, 幹事会にて行い, 評議員会に候補者を推薦する。

(論文賞と奨励賞)

第49条 論文賞及び奨励賞受賞候補者を選考するため, 論文賞受賞者選考委員会(以下「論文賞選

考委員会」と略称する)をおく。

第510条 論文賞選考委員会は, 評議員の投票により選出された5名の論文賞選考委員(以下「選考委員」と略称する)で構成し, 論文賞選考委員の互選により論文賞選考委員長をおく。論文賞選考委員の任期は1年とし, 連続して論文賞選考委員に就任することはできない。

第611条 本学会会員は, 論文賞選考委員会に対して論文賞及び奨励賞受賞候補者を推薦することができる。

第712条 論文賞選考委員会は毎年6月30日までに選考を終了し, 受賞候補者を決定する会長に答申する。論文賞選考委員会は必要に応じて参考人から意見を聴取することができる。

[受賞者の決定]

第13条 評議員会は, 学会賞選考委員会, 幹事会及び論文賞選考委員会から推薦された受賞候補者をもとに, 受賞者を決定する。

[受賞者の発表選考結果の報告]

第814条 学会賞選考委員長, 幹事長及び論文賞選考委員長は, 評議員会及びの総会において評議員会の結果を踏まえて受賞者の選考経過と結果を総会に報告する。

[授賞式]

第915条 授賞式は総会で行い, 学会賞, 学術賞, 功労賞及び論文賞受賞者へは賞状を, 奨励賞受賞者へは賞状及び副賞(賞金)を授与する。

[その他]

第1016条 本規定に定めるもののほか, 学会賞に係わる必要事項は内規として評議員会が別に定める。

[規定の変更]

第1117条 本規定の変更には評議員会の承認を必要とする。

[規定の施行]

第1218条 本規定は2006年8月5日2007年8月1日から施行する。

学会賞と学術賞選考に関する内規(新規)

(2007年2月3日の評議員会で決定)

1. 学会賞は, 第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動及び学会活動に貢献した会員に授与する。

2. 学術賞は, 第四紀学の発展に貢献した優れた学術業績をあげた会員に授与する。優れた編書・著書・論文などの一連の業績を対象とする。

3. 学会賞と学術賞の授与は, 原則として毎年とし, それぞれ若干名とする。

学会規定

4. 学術賞の対象成果が、複数の著者(研究グループ等を含む)によりなされたものである場合には、筆頭著者または代表者に学術賞を授与する。
5. 学会賞選考委員は、会長が専門分野を付記して推薦した10名以上の正会員のなかから、評議員の投票により選出される。得票数が同数のときは、専門分野の委員数が少ない者を委員とする。専門分野の委員数も同数の場合は、年長順とする。選挙の際には、分野を考慮した選挙を行うため、各分野からの候補者、過去3年間の学会賞選考委員会の名簿を明示する。なお、学会賞選考委員の任期は1年とし、3期以上連続して就任できない。
6. 学会賞選考委員が受賞候補者となった場合には、賞の選考に関与しないこととする。
7. 学会賞選考委員に欠員が生じた場合は、次点者を補充する。
8. 受賞候補者の推薦書類は、授与年の3月末日までに日本第四紀学会学会賞選考委員会宛てに提出する。
9. 受賞候補者の推薦書類には次の事項を記入する。賞の名称、推薦者名(自薦を含む)、受賞候補者名、受賞件名及び推薦理由。
10. 会長は第四紀通信に学会賞と学術賞の受賞候補者の推薦募集に関する記事を掲載する。
11. 論文賞選考委員会は、授与年の3月末日までに届いた自薦と他薦及び評議員から推薦された候補者の中から受賞候補者を選考し、会長に答申する。また、学会賞選考委員長は、評議員会と総会において、選考経過と結果を報告する。
12. 学会賞選考委員長は第四紀通信に評議員会で決定した受賞者と授賞理由を報告する。
13. 学会賞と学術賞の選考において、受賞候補者が、当該年の論文賞の受賞候補者となっても、双方の賞の妨げとしない。
14. 本内規の変更には評議員会の承認を必要とする。
15. 本内規は、2007年8月1日から施行する。

功労賞選考に関する内規(新規)

(2007年2月3日の評議員会で決定)

1. 功労賞の授与は原則として2年ごととし、授賞数は若干名とする。
2. 功労賞の選考に当たっては、以下の項目を参考にする。
 1. 第四紀学について多大な貢献のあった者や団

体、組織

2. 本会に関係した活動(たとえば役員、各種委員など)に貢献のあった者、INQUAの委員、学術会議のINQUA関連委員などを務めるなどの貢献があった者
3. 功労賞受賞候補者の選考は幹事会で行い、評議員会において幹事長が受賞候補者とその推薦理由を述べ、評議員会において決定する。
4. 選考を行う幹事会メンバーは、功労賞受賞候補者になれない。
5. 幹事会は、受賞候補者を授与年の6月末日までに選考する。
6. 幹事長は、第四紀通信に評議員会で決定した功労賞受賞者と授賞理由を報告する。
7. 本内規の変更には評議員会の承認を必要とする。
8. 本内規は、2007年8月1日から施行する。

第四紀学会 名誉会員候補者選考規定

(1975年11月17日評議員会承認、
2007年2月3日評議員会で改定)

日本第四紀学会会則に基づき、以下の規定により、名誉会員候補者を選考する。

・名誉会員候補者選考委員会

1. 評議員会は、原則として5年ごとに、そのつど名誉会員候補者選考委員会を設けることができる。
2. 委員数は若干名とし、会長が委嘱する。

・選考基準

1. 第四紀学について顕著な貢献のあった者
 2. 本学会誌に発表された論文のある者
 3. 本会会員歴20年以上の者
 4. 年令70才以上の者
 5. 本会に関係した活動、たとえば本会の会長、評議員をつとめる等、貢献のあった者
- 以上の条件を満たす者の内から、特に多大の功績があった者をえらぶ選ぶものとする。

III. 規定の変更には、評議員会の承認を必要とする。

IV. 本規定は、2007年8月1日より施行する。

[参考] 会則 第6条

会員は正会員、団体講読会員、賛助会員および名誉会員の4種とする。正会員は第2条の目的達成に寄与する個人とし、団体講読会員は会誌を定期的に講読する大学・研究所・博物館その他の機関とする。

賛助会員は、第2条の目的を賛助する会社その他の法人とする。名誉会員は第四紀学について顕著な功績ある者の中から評議員会が推薦し、総会の決議によって定める。

[名誉会員の権利に関する規定]

会則第7条

(略) 名誉会員は会費の納入を要しない。(略)

会則第8条

総会は正会員をもって組織し、(略)

会則第10条

評議員は正会員の中から互選される。ただし、会長経験者は被選挙権を有しない。会長・副会長・会計監査は正会員の中から評議員会において選出され、幹事は評議員の互選と会長の推薦による。(略)

会則第14条

会長・副会長・会長経験者および会長推薦の幹事は、評議員会に出席し、意見を述べることができる。役員選挙規定第14条

本規定による評議員選挙の選挙権及び被選挙権を持つものは、選挙実施該当年の2月1日時点の本会正会員とする。ただし、会長経験者は評議員選挙の被選挙権を有しない。

論文賞と奨励賞選考に関する内規

(1994年8月26日評議員会、8月27日総会、1995年1月28日評議員会、1997年8月6日総会、1999年1月30日評議員会、2006年8月4日評議員会、2007年2月3日評議員会で改正)

1. 選考の対象は、授与年の前々年及び前年の2年間(2巻分)の第四紀研究に発表された論説、短報、総説、資料、講座及び特集号の論文とする。奨励賞については、選考が行われる当該年の4月1日現在で、会員である35歳以下の筆頭著者の論文を対象とする。すでに奨励賞を受賞したことのある筆頭著者の論文は、奨励賞の対象とならない。

2. 論文賞と奨励賞の授与は原則として毎年とし、受賞論文数は論文賞が1-2編程度、奨励賞が2編程度とする。

3. 論文賞受賞論文が複数の著者(研究グループ等を含む)により執筆されたものである場合には、執筆者一同に論文賞を授与する。奨励賞については会員である筆頭著者に授与する。同一論文が、論文賞と奨励賞の候補となった場合には、論文賞を優先する。ただし、奨励賞受賞候補者であることを選考結果報告に記載し、奨励賞の副賞を授与する。評議員会で論文賞が授与された際は、奨励賞の副賞も授与する。また評議員会で論文賞が授与されなかった場合は、奨励賞候補者として評議員会で審議する。

4. 論文賞選考委員は、会長が専門分野を付記して推薦した10名以上の正会員のなかから、評議員の

投票により選出される。得票数が同数のときは、専門分野の委員数が少ない者を委員とする。専門分野の委員数も同数の場合は、年長順とする。

5. 論文賞選考委員が受賞候補者となった場合には、賞の選考に関与しないこととする。

6. 論文賞選考委員に欠員が生じた場合は、次点者を補充する。

7. 論文賞と奨励賞の選考に当たっては、論文の獨創性、将来の発展性、総合性や重要な発見などを選考の基準とする。

8. 受賞候補者の推薦書類は、授与年の3月末日までに日本第四紀学会論文賞選考委員会宛てに提出する。

9. 受賞候補者の推薦書類には次の事項を記入する。賞の名称、推薦者名(自薦を含む)、受賞候補者名、受賞候補論文名(巻号頁を含む)及び推薦理由。

10. 会長は第四紀通信に論文賞と奨励賞の受賞候補者の推薦募集に関する記事を掲載する。

11. 論文賞選考委員長は第四紀通信に評議員会で決定した受賞者と授賞理由を発表する。

12. 本内規の変更には評議員会の承認を必要とする。

13. 本内規は、2006年8月5日-2007年8月1日から施行する。

2006年度第5回幹事会議事録

日時: 2007年1月24日(水) 16:00 ~ 19:40

会場: 早稲田大学教育学部社会科資料室

出席者: 町田 洋(会長)、真野勝友(副会長)、斎藤文紀、池原 研、鈴木毅彦、遠藤邦彦、中川庸幸、久保純子(記録)

(議事)

1. 庶務

1) 土 隆一評議員の名誉会員推薦に伴い欠員が生ずるが、残りの任期が1年以内のため補充はおこなわないことを確認した。

2) 評議員による論文賞選考委員選挙の結果、松島義章、海津正倫、中村俊夫、樽野博幸、松下まり子、山崎晴雄(次点)各会員が選出された。

3) 評議員による学振科研費審査委員候補者選挙の結果、上位者6名に情報提供の依頼をおこなうこととした。

4) 評議員会議長候補者について協議した。

5) 選挙管理委員として、及川輝樹、大石雅之、奥田昌明、工藤雄一郎、竹下欣宏、宮地良典各会員に依頼することとした。

6) 転載承認: 日本ペドロロジー学会『日本の土壌』編

集委員会編『日本の土壌』(博友社)へ、松井・加藤(1962)第四紀研究第2巻、161-179の第4図を転載。同じく『日本の土壌』(博友社)へ、日本第四紀学会編『日本第四紀地図』(1987)I地形・地質・活構造図 B中央日本的一部分を参考にして作成した地形区分図として、ただし、どの部分を改変したかを明記することを条件とする。

7)協賛承認: IYPE シンポジウム(1月22日)、GUPI ジオフォーラム(2月3日)

8) (株)春恒社への業務委託契約を更新した。

2. 会計

評議員会報告用の中間報告について審議した。

3. 広報

1) 第四紀通信第14巻1号の編集完了、印刷中。ホームページへの掲載も行った。

2) ホームページの「だいよんき Q&A」について検討した。

3) さまざまなイベント情報をホームページに掲載した。

4. 企画

1) 2月3日のシンポジウム準備状況: 講演要旨集、宣伝用ポスターを作成した。

2) 評議員会資料の50周年記念大会報告の件

3) 1月27・28日テフラ講習会について

5. 編集

1) 「第四紀研究」編集状況について

2) 特集号と特集の超過ページ代の請求について

3) J-STAGEの準備状況。早ければ4~5月から公開可能。

6. 評議員会資料の準備をおこなった。

会場: 日本大学文理学部百周年記念館2階会議室
出席者: 町田 洋(会長)、真野勝友(副会長)、遠藤邦彦、岡崎浩子、奥村晃史、斎藤文紀、鈴木毅彦、兵頭政幸、水野清秀、久保純子(記録)

(議事)

評議員会の資料確認・準備をおこなった。

2006年度第6回幹事会議事録

日時: 2007年2月3日(土) 10:00 ~ 10:20

第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事: 兵頭政幸(mhyodo@kobe-u.ac.jp)宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が出来た段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 神戸大学内海域環境教育研究センター 兵頭政幸
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 電話 078-803-5734 Fax 078-803-5757

広報委員: 松下まり子・後藤秀昭 編集書記: 岩本容子

第四紀学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr> から第四紀通信バックナンバーのPDF ファイルを閲覧できます。